

2005 年度 第 4 回館長会 会議録

1. 日時：2005 年 6 月 10 日（金）12：00～13：30
2. 場所：昭和女子大学学園本部館 3 階中会議室
3. テーマ：「大学図書館利用者サービスと組織改革」
4. 議事：

会を始めるにあたり、部会長校である林駒澤大学図書館長より、今回の館長会のまとめは詳しい議事録ではなく、要旨を私立大学図書館協会会報および私図協ホームページに掲載する方法で行いたいとの提案があり、異議がなかったため、その方法で各館への報告が行われることになった。

(1) 館長会開催の趣旨：林駒澤大学図書館長

館長会は、図書館長が集まり各大学の実情や情報交換を目的として、2002 年度に武蔵工業大学で第 1 回が開催された。その後、2004 年度に東地区部会総会時に開催することが正式に位置づけられた。4 回目となる今回は、業務委託を導入するなかで、図書館職員の職務をどのような組織で体现するかについて懇談したい。

(2) 「大学図書館利用者サービスと組織改革」

事例報告：駒澤大学図書館長 林 達也

駒澤大学が業務委託を導入した経緯として、利用者サービス及び作業効率の向上の目的のもと、2003 年度に館員によるワーキンググループを立ち上げ調査・検討を行った。その結果をもとにして、2004 年度より業務委託（閲覧・整理）を導入した。業務委託の導入により、一定の成果は出たものの、同一業務を専任職員と委託とが共同で行うことの弊害、例えば両者の関係性、責任の所在の不徹底が見えてき、同時に潜在的な学生の要求と図書館利用実態の乖離の問題もあり、委託する部門はすべての作業を委託に任せ、職員はなすべき仕事を持ち、両者相俟って、利用者サービスと作業効率の向上へ向かうべきではないかと考えるに至った。そこで係長を中心として何を職員のコア業務とするのかを検討し、2005 年度より組織を一新した。高度な技術を安定的に維持しなければならないシステム、定型業務である整理、閲覧は業務委託とし、同時に職員の業務を目的別に管理・運営・広報企画・選書・レファレンス・コンテンツ（電子図書館、オンラインデータベース、ホームページ管理）に設定し、こうしたことが外側からも見えるような組織にした。職員のモラルもこの方が高まると思う。結果的に 3 課 7 係から 2 課 6 係となった。

(3) 事例報告に関する意見・質問

主な意見・質問は、つぎのとおりである。

報告に関連して

- 「組織改変をすることは、大きな労力を伴うが、どういった背景があったのか。」
- △「業務委託導入の経緯としては、さまざまな研修会に出席している職員にレポートを提出させ、それをもとにワーキンググループを結成し 1 年間程度調査検討を行った。業務委託導入後、組織改変について、係長会で検討するという順序で行った。」
- 「組織改変後、課長の定数が削減したが、大変なことではなかったか。」
- △「目的をできる限り説明し、職員の納得を得ながら、改革を行った。」

各館の取り組み等

「副館長をなくし、課を廃止し、係長も置かず、主任を置く体制にした。学科担当制度の職員を決めて、図書館の動きを説明、教員からのニーズ集約をする担当を置いている。」

「事務方の壁を感じている。図書館長は、各学部ローテーションで就任するため、事務職員にとっては、何もしない館長が良い館長となっている。」

「大学の図書館内の運営の現状は各館さまざまであると思われる。館長が運営にどの程度関わっているかを知りたい。運営の実態を調査したらどうか。」

業務委託と図書館専任職員

「業務委託が進む中で業者も人材が不足しており、業務委託のレベル低下が気になる。大学としては、技術継承して育てていくという立場も確保する必要がある。」

「現在の委託の作業レベルについては満足できる状態にある。専任職員と委託との密接な連携、緊張関係の保持が図書館のスムーズな運営にも、委託の作業水準の安定化にも必要と思われる。現在、アウトソーシングの業者との月1回定例の会議を開き、意見交換をしている。また日常的に連携する係とのコミュニケーションを図るように心がけている。一方において、すべての職員が学生対応する機会を設けるためにも、昼休み時間帯に交代でカウンターに立つようにしている。」

「新しいキャンパスはアウトソーシングが進んでいるが、昔からのキャンパスは専任とアルバイトで運営されている。旧キャンパスでもアウトソーシングの導入が検討されている。図書館職員にしかできないことを考えないと、アウトソーシングの導入がほとんどになってしまう。職員を育てたいが、育てる時間がない。自前で育てていく方法が考えられないか。」

「図書館の内部で技術の伝承をしていくことは大切だが、一般職員として採用されて、図書館に配属されているといったことも背景としてある。」

「図書館の建替えを機に、ICタグを図書につけた。司書の継承技術は不要になるのではないかな。近い将来、販売時点で図書にICタグが内蔵されるようになるはずである。そうなれば、多くの図書館で採用することは可能となる。アメリカの図書館では、アウトソーシングではなく、学生のアルバイトによって24時間開館をしている。アルバイトをする人は、1ヶ月何冊読むという取り決めがある。」

「司書資格をもつといっても一様ではなく、高いレベルを志す司書とそうではない司書とがいるのではないかな。たとえば明治大学等いくつかの大学では図書館リテラシー教育が授業の中で位置づけられており、この授業でコマを担当する司書もいる。アルバイトの件は、大変興味深い。」

「技術の継承は必要ないと考える。司書ではなく、現在の図書館の課題に対応できる人が必要である。」

「私の大学ではカリキュラムのなかで学生が図書館業務に参加し、ルーチン・広報・HP・学生のニーズの調査等の実務をやっている。こうした過程で有能な司書を育てようとしているのだが、アウトソーシングの広がりや、司書を育成することや、学生を図書館運営に参加させ、教育するなどの方向性への阻害要因となる可能性もあるのではないかな。」

「アウトソーシング導入については、館内の職員のなすべき仕事と技術継承の問題についてきちんと見定めることが前提となるように思う。学生、特に院生の研究能力を向上させる意味合いも大切だと考え、大学院生によるレファレンスアシスタント（ティーチングアシスタント）も検討したが、まだ実現に至っていない。」

最後に松井龍谷大学学術情報センター長、木村昭和女子大学図書館長にご挨拶いただき、林駒澤大学図書館長により、会を締めくくった。